

11 道 徳

道徳プロジェクト

1. 道徳教育における豊かな感性の育成

(1) 道徳教育で求めるもの

道徳教育では、自らの役割と責任を自覚し、よりよく生きる生きる人間の育成をねらいとしている。今回の学習指導要領の改訂では、社会の変化に主体的に対応できる心豊かな児童の育成を図ることが基本的なねらいとされているように、道徳教育の役割はより重要になっていると考えられる。

これからの学校教育が基本として目指し、道徳教育において重視される「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成」を実現するために、具体的にはどのような心や態度の育成に力を入れる必要があるのだろうか。

『道徳教育指導上の諸問題』(文部省：1990年)によると、豊かな心を育むために育成したい心として、「真理を求める心、自然を愛し美しいものや崇高なものに感動する心、生命を尊重する心、他人を思いやる心、感謝の心、公共のために役立とうとする心など」があげられている。また、たくましく生きる人間を目指して、「すこやかな精神と身体、基本的な生活習慣、自らの意志で社会規範を守る態度、自律・自製の心、強靱な意志と実践力、自ら生きる目標を求めてその実現に努める態度」の育成が求められている。

このことから、道徳教育においては、生きることの大切さを感じ、希望をもって主体的に生きていく児童の育成をより重視していく必要があると思われる。

(2) 道徳教育における豊かな感性の育成と必要性

児童は、日常生活の中で様々な体験をし、道徳性を身につけていく。しかし、単に体験をするだけでは、道徳性の育成につながるとはいえない。つまり、道徳教育で必要とされる体験は、豊かな心の育成に通じる豊かな体験でなくてはならない。道徳教育では、「豊かな体験による内面に根ざした道徳性の育成」が強調されているが、このことは、豊かに感じ、考える内面的な力の育成としても捉えることができる。つまり、本校の目指す道徳教育における「豊かな感性の育成」により、児童が日常生活における様々な体験を通して道徳性を自分で身につけたり、自分自身の手で豊かな体験活動を生み出したり、深化・発展させていくことが期待される。

2. 豊かな感性を育む道徳教育

(1) 個が生きる道徳教育（自己を高める評価力の育成）

本校では、これまで「個が生きる道徳教育」(子どものよさを生かし、子どもが主体的に生きようとする)を求めて、次の点を重視してきた。

○ 児童の実態を把握して指導する。

実態把握にあたっては、個が生きるという観点から、一人一人のよさや持ち味をまるごと受け入れていく。また、活動前のみでなく、活動中や活動後の実態把握も大切にす。

○ 全員が主体的に参加できる活動を計画する。

外面的な参加としては、児童一人一人が様々な考えを発言したり、表現する場を保障する。

内面的な参加としては、活動の中で一人一人が自分と真剣に対話できるようにする。

また、昨年度は「自己を高める評価力の育成」を研究テーマとして、実践研究を進めた。具体的

には、ア児童や児童を取り巻く環境に対する十分な実態把握、イ児童が自分なりに見通しをもつことができる活動や授業づくりを大切に「自己を高める評価のできる活動や授業づくり」を重視して、道徳教育や道徳の時間に取り組んできた。

本年度は、これまでの取り組みを継続しながら、豊かな感性を育む道徳教育を目指していく。

(2) 豊かな感性を育む道徳教育の条件

豊かな感性を育む道徳教育にあたっては、まず、「豊かな感性を育む」という視点において、道徳の全体計画を見直し、改善を図る必要がある。たとえば、児童の実態や教師や保護者の願いにおいて、「豊かな感性」の視点を加えた記述をしていくことにより、日常の指導の中に生かすことができると考えられる。豊かな感性を育む道徳教育の条件として次の点考えた。

- ① 学校での体験活動を道徳性の育成の視点からとらえなおす。
- ② 各教科等において育成される児童一人一人のよさを把握して、道徳との関連を図る。
- ③ 児童の日常生活の場、全てにおいて感性を育む道徳教育を考える。
- ④ 道徳の時間を中心として、総合単元的な学習づくりを構想する。
- ⑤ 豊かな感性を育む道徳的な環境づくりを進める。

(3) 豊かな感性を育む道徳の授業の条件

児童は、各教科・特別活動等の学習において、豊かな経験をし、道徳性を身につけている。しかし、それらは必ずしも調和のとれた道徳性の育成とはいえない場合もある。道徳の時間において、道徳的価値の全般にわたって、基本的な内面的な自覚を図る必要がある。

豊かな感性を育む道徳の授業づくりにあたって、具体的には次の点を大切にしたいと考えた。

- ① 道徳の授業に向けての雰囲気づくりが行われていること

豊かな感性を育成する上では、まず道徳の時間そのものに対する児童の興味・関心を高めておくことが必要であると思われる。児童が心を開いて学習できるように、支持的風土も含めて、学習に入る前の雰囲気づくりを大切にしたい。

- ② 児童がすでにもっている見方・感じ方を意識化させながら、学習に入ることができること

授業の導入では、多くの場合、本時に学習する道徳的価値そのものや資料に対する興味の喚起が行われる。この段階で、児童が自分の体験を自分自身の中で十分に想起する時間を保障し、授業が展開されるならば、児童の思いがより豊かになると思われる。その意味で、授業の導入のあり方を検討していきたい。

- ③ 資料の中の場面に児童が自分の思いや豊かな想像をもって入り込み、感じたことを自由に表現できる場を保障されていること

道徳の時間では、資料による間接的な体験の中で、児童が新たな感じ方や今までとは違った見方・考え方をする自分に気付くことが期待される。そのためには、資料における場面に十分に自分自身の感じ方や想像をふくらませて、入り込むことが必要である。①の支持的風土ともかかわるが、動作化や役割演技などを通して、資料の状況や登場人物の感情に共感する場と時間を十分とることは豊かな感性を育成する上で大切にしたい。

- ④ 授業の中で追求してきた道徳的価値について、授業後も児童の心が豊かにふくらむような終末であること

道徳の時間のみで豊かな感性を育成するのではなく、この時間の発展としての道徳教育の中で、さらに発展させていくことを見通した終末を考えていく。

《参考文献》文部省「小学校道徳教育指導上の諸問題」(1990年、1～7頁)

文部省「初等教育資料」(1993年No.596、50～59頁)

同上 (1993年No.595、60～67頁)